

東日本大震災 ともしび会ニュースレター

2022
April

ごあいさつ

早いもので、2011年3月11日の東日本大震災から11年という月日がたちました。

世界は今、皆で新型コロナウイルス感染症のパンデミックと戦っています。人との会話、通学、通勤、あたりまえの生活がどれほど幸せだったのか、私たち一人一人が、今、その思いをかみしめています。

11年前に突然あたりまえの生活を奪われた学生たち。当時小学生だった彼女たちは、悩み、苦しみながらも皆様からの経済的な支えをいただき、たくましい精神力を培い、自ら生きる力を育み大きく成長しています。今年ご支援いただいた6名の学生のうち4名がこの春、社会人として巣立つことになりました。

ご支援していただいたすべての皆様へ彼女たちからの感謝の思いをここにお届けさせていただきます。

東日本大震災ともしび会
代表 柴山 恵子

この度は二年間にわたり温かいご支援をくださり誠にありがとうございます。

二年という短い学生生活でしたが、皆様のおかげで無事に卒業を控えることができました。心から御礼申し上げます。

十一年前の三月十一日、私は小学校三年生でした。

私の住んでいる地域は津波の心配はありませんでしたが、原子力発電所が爆発したことにより放射性物質が漏れ、避難を余儀なくされました。幸いにも親族で亡くなった方はいませんでしたが、生まれ育った思い出が溢れる場所から突然追いつかれる気持ちは空虚なものでした。

しかし、東日本大震災があったからたくさん人の貴重な体験ができました。小さな町で暮らしていたらできなかったであろう友人や「震災を伝える」という目的で交流させてもらった方々。東日本大震災を通して様々な考えや思いに触れ、自分自身成長できたと思っています。

今年の三月で東日本大震災から十一年を迎えようとしています。私のふるさととは十一年経った今、少しずつ人が集まってきました。道の駅ができたり、お買い物ができるお店が増え復興が進んでいます。そんなふるさとで人生の節目のひとつである成人式を迎えられる事、嬉しく思います。

学生生活は非常にあっという間でした。そう感じるのも一日一日が充実し、中身の濃いものだったからに違いありません。好きなことが日を重ねるにつれて、自分の中で確かな知識として身に付く感覚がありました。実習や栄養士実力認定試験対策など栄養士として

活躍するための講義は自分の知識や技術を知らするために非常に重要で、積極的に取り組んでいました。

三月には桜の聖母短期大学を卒業し、四月からは新社会人です。社会人という新たなステージに立つ日まで、近くで支えてくれた家族はもちろん、温かなご支援をくださる周りの方々のお力添えがあってこそ今の私がいると思っています。

春からは県内の社会福祉法人で栄養士として働かせて頂きます。保育園が高齢者施設、どちらの配属になるか未定ですが、「食」の大切さと食糧のことの幸せをたくさんの人に知ってもらえる栄養士を目指して頑張ろうと思っています。

最後になりますが、この二年間ともしび会の皆様の温かく大きな愛に支えられ、短大生活を送ることができました。いただいた愛を忘れることなく、今後も精進してまいります。ありがとうございます。

(生活科学科 食物栄養専攻コース 二年)



この度は、二年間という長い期間の中
たくさんのご寄付をいただき誠にありが
とございました。卒業を控え、改めて
これまで支援してくださった皆様には感
謝の気持ちでいっぱいです。また、新型
コロナウイルスによりアルバイトも思う
ようにできない中で、皆様からのご支援
が生活の支えとなりました。

私は福島県南相馬市小高区出身です。

震災が起きた当初、私は小学三年生で
した。震災が起こってから、今まで当
り前だと思っていたこと、学校に行くこ
と、学校帰りに団地の友だちと夕方まで
遊ぶこと、家族四人でテーブルを囲んで
夕食を食べるといことが、どれほど幸
せなことだったのかを思い知りました。

震災後は、福島市の叔父の家や避難所
をいくつか回り、家族ともバラバラで生
活することが増えました。

しかし、避難した先々でたくさんの人
の温かい優しさに触れ、新たな出会いも
ありました。震災を通してたくさんのこ
とを経験できたことは、私にとってかけ
がえない思い出になりました。

二〇二二年、震災から十一年を迎えま
す。被災地の復興は進み、私の地元の街
並みも新たな姿として賑わいを取り戻し
ています。

定期的に、地元に戻り散策したり、家
族で昔のように家でご飯を食べたりする
と、もし震災が起きなければ、小さいこ
ろから仲の良い友だちとずっと違った生
活を送っていたのではないかと考えるこ

とがあります。

春からは保育士として、子ども一人ひ
とりの個性を尊重できる保育士を目指し
て精一杯頑張っています。また保育
士としてだけではなく、人としても誰か
の役に立てるようにしたいです。

この二年間、桜の聖母短期大学での学
びは本当に充実したものでした。同じ夢
を持つ仲間に出会い、ともに学び、本
当に楽しい学生生活を送ることができま
した。保育士資格を取るうえで、実習など
を通し、教育というものの難しさや楽し
さ、やりがいを知ることができました。

最後になりますが、この二年間不自由
なく大学生活を送ることができ、家族の
負担を減らすことができ、たくさんの学
びや友人との最高の思い出を得られたの
は、ともしび会の皆様からのご支援のお
かげです。

月に一度、シスターの先生にお会いす
る場では、私の体調を気遣ってくれたり、
たくさんお話をし、時にはアドバイスを
して下さり、とても楽しい時間で会う
のが楽しみでした。なので、お会いでき
なくなるのが寂しく感じますが、本当に
ありがとございました。この感謝の思
いは一生忘れません。皆様からいただ
いた温かい気持ちを胸に、今後は保育士と
して頑張っています。

(生活科学科福祉子ども専攻

子ども保育コース 二年)

このたびは二年間にわたり温かいご支
援を頂き、誠にありがとうございます。

震災当時小学三年生だった私は、祖母
の家に向かう車の中で大きな揺れを経験
しました。車の中に居ても分かる大きな
揺れに動揺し、不安な気持ちで一杯だっ
たことを強く覚えています。

祖母の家に着いてからも余震が続いて
いたためとても怖かった上に、父は仕事
で帰ってくる事が出来ず「お父さんに
早く会いたい」という気持ちでいました。
地震が落ち着いてからは帰れると思っ
ていましたが、放射線の影響で転校する
ことになったため、南相馬にいる友達や
近所の人にお別れの言葉を伝えられな
かったことがとても残念で、今でも皆が
どうしているか気になって寂しくなるこ
ともあります。

また、新しい土地で一から友達をつ
くらなければならぬ不安から、南相馬で
の友達との日常が恋しくなり寂しいこと
も沢山ありました。

しかし、いざ転校してみると周りの友
達や先生が沢山話しかけてくれたり、教
科書を見せてくれたり分からないことを
手伝ってくれたりしたため、すぐに馴染
めてとても楽しかったことを覚えています。

高校生活もとても充実していました
が、将来どんな自分になりたいかが想像
できておらず、その先の進路を決められ
ずにいました。

しかし、当時担任だった先生に「桜の
聖母を見てきてごらん。なりたいたい自分
が見つかると思うよ。」と勧められて来てみ

ると、どの先輩も笑顔で優しくキラキ
ラして見え、私も先輩方のようになりた
いと考えるようになりました。

支援が充実しているということもあ
り、私は念願だった桜の聖母で大学生活
を送ることができ、二年生になった私は
当時憧れていた先輩方に少しでも近づけ
たようでも幸せです。

震災を通して辛い思いも沢山しまし
たが、それ以上に周りの方々の温かさに
気がつくことが出来た経験になり、今は前
を向いて歩くことが出来ています。

このように一日一日に感謝しながら温
かい毎日を過ごしているのは、家族や友
人はもちろんのこと、顔も名前も分ら
ない私のために支援を続けてくださって
いるともしび会の皆様のおかげです。

大学での学びを通して新しい自分と出
会うことが出来たことや、震災での転校
をきっかけに出会えた皆様の温かい支えを
通して私は、今度は皆様の温かく支えて
いける人になりたいという夢があります。
この夢を叶えるために就職活動を続
け、地元へ寄り添いながら沢山の人の
出会いがある企業に内定を頂くことが出
来ました。

社会人になると大変なことも沢山ある
と思いますが、今度は私を支えてくれた
皆様に恩返しできるよう、新しい環境で
も前を向いて歩いていきたいと思いま
す。

本当にありがとうございます。

(キャリア教育学科 二年)

ともしび会の皆様、ごきげんよう。

この度は皆さまの温かいご支援に感謝しております。誠にありがとうございます。

東日本大震災の時、私は小学二年生でした。放課後、帰りのバスを待っているとき、急に立っていられないほどの大きな地震が起こり、私は放心状態になりました。長く大きな揺れだったうえに余震が続き、怖くなって泣き出したのを覚えています。兄と小学校の体育館に避難し、親の迎えが来るのを待ちました。無事に家に帰ると、家は半壊し、家の中は割れたガラスや食器、倒れたタンスなどが散乱していました。震災時に母は家について、倒れてきた大きなタンスの下敷きになりそうだったという話を聞き、母がいなくなるかもしれない恐怖に、今生きていること、今までの当たり前前生活がどれほど幸せだったかを改めて実感しました。

高校に入学し、卒業後の進路については震災の影響で経済的な問題があるので進学が厳しく、就職を考えていました。そんな時、知り合いの栄養士の方のお話を聞いて、中学校の家庭科の先生が、「食べることは生きること、生きるとは食べること」と言っていたことを思い出して、食事の大切さを改めて実感し、栄養士の仕事に興味を持ちました。学校の先生方からは進学を勧められていたので打ち明けてみると、校の聖母短期大学を紹介していただき、ともしび会のご支援のおかげで金銭面をあまり気にせず、入学を考えることができました。

現在私は、一人暮らしをしながら栄養士になるために一生懸命勉強しています。知らない土地での一人暮らしは楽しみだった半面不安もありましたが、同じアパートの先輩方に支えていただき、楽しく過ごしています。また、いろいろな人と関わりたい、誰かの支えになりたいという思いから、ミリアムロータークラブというボランティアサークルに入りました。新型コロナウィルスの影響でなかなか活動は出来ませんでした、こういう経験を通して自分の成長に繋がれたらと思います。

さらに、高校の時には経験できなかったアルバイトも経験し、仕事の大変さを実感しました。社会人への準備だと思つて、二年間で人間的に成長できるように頑張りたいと思います。

私の夢は管理栄養士になることです。食事の面から人々の健康を支え、心に寄り添うことができる管理栄養士を目指しています。また、私たちが経験した東日本大震災のような災害が発生したら、栄養・食生活の面で支援を行いたいと考えています。人との関わり、縁を大切にこれからも自分の思い描く理想像に近づけるように、学習面も生活面も向上させていきたいと思っています。

最後になりますが、改めてお礼申し上げます。ともしび会の皆様の温かいご支援のおかげで、一年を充実した生活を送ることができました。ありがとうございます。これからもよろしくお願ひいたします。

(生活科学科 食物栄養専攻コース 一年)

この度は、二年間に渡り温かいご支援・ご協力、本当にありがとうございます。私は相馬郡飯館村出身の者です。東日本大地震を経験し、放射線の影響から飯館村で暮らすことが困難になり、大阪へ一年半の間、避難していたことがあります。多くの苦難を乗り越えて、今ここ校の聖母短期大学で保育士となるための勉強に臨んでいます。

震災の影響で、辛い思いや大変な思いもたくさんしました。例えば、今まで勉強や遊びを共にしてきた幼稚園からの友人と一時を境に離れ離れになったり、避難した先でイタズラをされたりなどです。

ですが、このような辛く大変な思いを必死に乗り越え、私は強い女性になれたと身をもつて感じています。どんな辛いことも乗り越え、前を見て進むという強い芯が育つたと思います。また、誰に対しても思いやりをもって接するようになってきました。自分がされて嫌なことを相手にしないよう意識したり、初めて会った人や、見知らぬ人にも優しく接したりすることが当たり前になりました。それは、大阪へ避難した時に優しくしてくれた人々のように、私も人に対して思いやりや優しさをもって接していきたいと感じたからです。福島から突然引っ越してきて、学校で必要なものが何も無く困っている私に、習字セットをくれたり、ランチョンマットをくれたりなど、本当に快く私のことを受け入れ、たくさん助けてくれました。物ばかりではなく、学校の休み時間もたくさん話しかけてくれたり、

休日も遊びに誘ってくれたりしました。本当なら、いじめをされたり、見放されたりしてもおかしくないと思っていました。ですが、助けられることばかりでした。私はその時「本当に心から優しい人って、目に見えるんだなあ」と、思いました。そして同時に「私もそういう人になりたい」と思つようになりました。優しさが溢れ、滲み出るような人間として、生きていきたいと心から思いました。それから私は、自分の中で「誰に対しても優しく、平等に接する」というのがモットーのひとつになっています。

東日本大震災を経験し、一度はどん底に落ちたと思いましたが、人間として生きていく中で最も重要だ、と言つていい位大切なことを教えてもらったと思います。確かに今もまだ震災の時の傷は、現地や私の心の中にも残っています。そして、その傷が消えることはありませんが、これからのようなことがあっても、この経験をバネに頑張っていけるような気がしています。

そして、私が春から働かせていただく児童養護施設でも、一人間として、一人として、そして一保育者として、胸を張って頑張れるような気がしています。

ともしび会の皆様のあたたかいご支援、長期に渡つてのご協力があってこそ、そう思えるのだと思います。家族全員、ともしび会の皆様から、感謝しています。改めて、本当にありがとうございます。

(生活科学科福祉子ども専攻)

子ども保育コース 二年)

ともしび会の皆さま、ごきげんよう。

私がこの桜の聖母短期大学に入学を許可されてから、たくさんのお温かいご支援を頂き心から感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

震災当時、私は小学校3年生に上がる春でした。地震が発生したときは学校が終わり、徒歩で集団下校中でした。大きな揺れが突然始まり、体験したことのない恐怖を感じその場で軽いパニックになり、友達と泣きあっていたことを覚えています。

当時、家が近かった友達と恐怖を感じつつ、何とか家に帰宅すると、目の当たりにしたのは元の姿とは全然違う家でした。私たち家族が住んでいた家は全壊してしまい、玄関のドアが地震による歪みで閉まらなくなっていたり、食器類はほとんど割れていました。まだ幼かった私は「家を失った」という状況を理解することができず、これからの生活にも不安を感じてしまい、母に泣きじゃくる日々が続きました。今まで家族と過ごした空間がなくなってしまうことや、家の中の割れた食器で足の踏み場もなくなっていたこと、当たり前のように倒れているタンスや窓のガラスの破片が散らばっていて、あの時のショックと不安、恐怖は成長した今でもなかなか忘れることができません。それと同時に今までの何気ない普通の生活ができていたことがいかにすばらしいことか、感謝を感じました。

私たちは家が全壊してしまったので、次に住む家が見つかるまで祖父母の家で

生活をしていました。

その間も日々ニュースの映像で見る東日本震災の後の様子は非常につらいもので、幼いながらに気が滅入ってしまうような日々が続いていました。

ようやく生活のめどが立ち、私は新しい場所へ新しい学校へ通うことになりました。その時が初めての転校だったのですが、とても緊張してしまい、周囲の環境になかなかなじみずじまいました。友達とのいざこざが起きたり、転校生ということとで差別を受けたり、本当に信頼できる友達が当時はおらず、震災後はなかなか笑顔でいることが少なくなっていたように思います。

ついに学校に行くことを拒否し始めた私を常に励ましてくれたのは母でした。時には厳しい言葉もありましたが、すべて愛のある言葉であり、すべての経験が今の私に繋がっていると思います。

高校三年生になり、進路決定の時期が迫りました。私は大学で勉強をして、将来の自分の可能性を広げたいと考えていましたが、金銭的な事情もあり、その気持ちを半分諦めかけている状況でした。そんな中、担任の先生と進路指導の先生から、私のしたい勉強と、桜の聖母短期大学の充実した支援、先生方の厚いサポートが私にあっていて、ではないかと、新しい選択肢を教えてくださいました。

実際にオープンキャンパスに訪れると、私もこの学校で勉学に励んで充実した2年間を送りたいと強く思いました。

家族、先生と何度も相談をして、進学することが許され、今、昔の私では考えられないような充実感や、新しい物事に触れて刺激のある有意義な時間を過ごしているこの状況にご支援を頂いた皆様には、心からの感謝でいっぱいです。

今の私があることは、決して当たり前前なことではなく、皆様のご支援による非常に大切な経験です。これからも、一つの授業を大切に、資格の取得にも力を入れていきたいと考えています。これから、就職や編入と、進路活動が始まりますが、将来この桜の聖母短期大学で学んだことを社会人として活かしていきたいよう日々努力をしていきます。

最後にはなりましたが、この一年間、ともしび会の皆様のご支援は、私と私の家族の経済的、精神的に大きな支えとなり、何卒、心より感謝申し上げます。

このご恩に感謝し、これからも素晴らしい学生生活を送ってまいります。残りの学生生活も一日一日を大切に過ごしていきますので、何卒、よろしく願いいたします。

(キャリア教養学科 一年)

ともしび会事務局

熱海紀子・齋藤桑子

☎024(531)6805

Email : s-soko@ssg.ac.jp

ご寄付振込先

【ゆうちょ銀行】02230-4-126091

東日本大震災ともしび会寄付金口

【東邦銀行 本店】普通預金3682660

東日本大震災ともしび会

代表 柴山恵子

東日本大震災から十一年目を迎えた三月十一日。
一昨年からは、世界中が新型コロナウイルスの影響でいろいろな自由をお互いに抱え、支え合う日々となりました。
あたりまえの日常がどんなに幸せだったのか、震災と重ね合わせながら、皆様に感謝をし、希望に満ちた子どもたちが綴ったお手紙に胸が熱くなります。皆様からのお力添えを励みに今後も未来ある福島の子どもたちを応援し、寄り添ってまいりたいと思います。
末筆となりましたが皆様からお寄せいただきましたご厚情に重ねて御礼申し上げますと共に皆様の上に神様が豊かにお報いくださいますようお願い申し上げます。
感謝のうちに

ともしび会事務局
熱海紀子・齋藤桑子